

て勤めること三十五年、ようやく暖簾分けを許され、西里通りの真中に酒店を構え、好きな絵筆を楽しむ。そこには大勢の墨客が出入りした。明治・大正・昭和の三代に渡る地方の文人である。

昭和三十七年五月十二日に享年六十六歳で歿する。

(神岡町史編纂室資料)

第二章 示教

一、神主

伊藤正泰 (神官)

天保十一年(一八四〇)〜大正十四年(一九二五)

羽場六助 (文人)

天保二年(一八三一)〜明治四十二年(一九〇九)

袖川の人。奇行が多く、羽場六として知られる。茶亭を開く等、風流な遊びに心を寄せ、狂句等の詩文をよくする。

日清・日露戦争には、自費で号外を船津町から取り寄せ、太鼓を打ち鳴らしながら村人に戦況を伝える。出征軍人には茶代を取らず、かえって豆や勝栗を贈って歓待する等、公共的なことに尽くすことが多い。

明治四十二年に享年七十九歳で歿する。

(神岡町史編纂室資料)

船津堀川町の人で、和歌を富田礼彦や住吉瀬武から学ぶ。明治の初めに筑摩県の巡査となり、大野郡白川村に駐在、その後大津神社宮司となり、付近の村社数社の社掌を兼務する。長年の勤務で多大の功績を挙げる。

「大津の宮を詠んだ歌」

『真榊(まさかき)にかけて捧げし白木綿の

なびくや神の心なるらむ』

(神岡町史編纂室資料)

荒垣正一郎 (敬神家)

明治二十一年(一八八八)〜昭和四十一年(一九六六)

氏は、大野郡丹生川村森部、大下家の人。荒垣彦兵衛の長女敏と婚姻し養子となる。

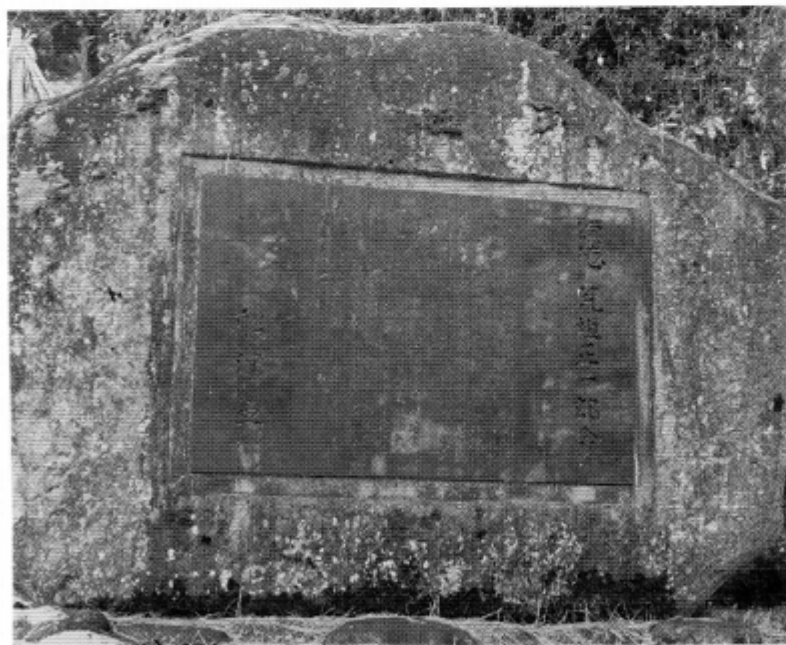
義弟に当たる荒垣秀雄氏は「大津神社の思い出」の中で「終戦翌年に帰郷した時、大津神社の氏子総代をして

いた兄正一郎の所へGHQの米軍将校が来て、大津神社の財政が町の自治体公費によって賄われていないか等といろいろ究明していた。海軍時代に軍艦で外国へ行った経験のある兄は、普段通りの平静な態度で神社と氏子のあり方等を神妙に説明していた。私は兄を見直した。」と信念の強さを評している。

氏は敬神の念が篤く、船津区長としても大いに活躍する。その顕れが大津神社境内に建つ顕彰碑である。

荒垣翁の顕彰碑を神社境内地に建てた理由は、その碑文を一見すればすぐ理解できるように、翁が船津区及び産土神大津神社に永年尽くした功績を褒めて作った頌徳碑である。翁は昭和二年（一九二七）以来四十余年に渡り正副区長・氏子総代長を歴任、その間区政においては他の自治体の一ヶ町村に匹敵する戸数千数百戸にのぼる大区の政務をよく統轄して、寸分の隙間がない。

翁の日常は奉公の精神でつらぬき、無欲恬淡、公平無私の性格とその姿勢は支那事変に続く大東亜戦争と、永い暗黒時代においても発揮し、区民等しく翁の励ましを得て郷土を守り抜く。特に、戦後は区民の意志を尊重する区政を行い治績を挙げると共に、一方大津神社の繁栄と護持に心魂を傾けたことは、よく人の知るところである。かく翁は誠実と行動の人であったことをよく理解していた岐阜県神社庁々長上杉一枝氏自ら筆をとり「翁の頌徳碑文をものにした。」と「大津神社誌」に縷々述べている。



荒垣正一郎「顕彰碑」
(大津神社境内)

氏は船津信用組合の第三代理事長としても金融界にも多くの業績を残している。

昭和四十一年五月六日に歿する。享年七十八歳。

(大津神社資料)